

## 三宅明正先生を送る

趙 景 達

何ともにぎやかな人が去っていく。三宅先生は私たちをいつも愉快にさせてくれた。いや、ここでは失礼ながらあえて三宅さんと呼ばせてもらいたい。私は長きにわたって同僚として接し、互いに「さん」付けで呼び合ってきたので、「先生」というのは、何か冷たい感じがしてしまう。

三宅さんとはよくおしゃべりをし、馬鹿な冗談を言い合ってきた。ふと思いついてみると、何とも愉快であったが、今となっては懐かしむ気持ちがぐっとこみ上げてくる。共同研究もやり、韓国にも何度か一緒に行った。また、個人的にはご自宅に何度も呼ばれ、三宅さん自慢の手料理を振る舞われたことが忘れられない。妻とも一緒にお邪魔したことがある。三宅さんはあまり酒を飲む方ではなかったが、なかなかのグルメで、料理にほどほどの自信があるのである。もっとも料理本が調理の傍らに置かれてはいた。まあ、いずれにせよ、大変な手のこりようで、食事の前には献立が出され、本日の前菜からメインディッシュ、デザートまで書いてあり、一通りの説明を受けるのである。その日は、料理の話から始まり、歴史の話、現在の話など実に様々な話題が飛び出し、笑いに包まれた暖かい宴が、夜が更けるのも忘れてあつという間に過ぎていくのであった。

さて、前置きはこのくらいにしておこう。定年教授を送る際の常道に乗っ取って、三宅さんの業績を簡単に振り返ってみたい。三宅さんは日本を代表する日本現代史研究者の一人である。三宅さんは20世紀初期の労働運動史研究からキャリアをスタートしたが、その業績は『歴史学研究』『日本史研究』『社会経済史学』の3誌に相継いで掲載された。この3誌は日本を代表する歴史学研究の権威的な学術誌であり、レフェリー審査が飛び抜けて難関であることで知られる。最初の論文3編が立て続けにこうした難関学術誌に載るなどというのは、珍しいことこの上なく、近年ではほとんど聞か

い。三宅さんがいかに将来有望な研究者として目されたかは、いうまでもない。そのことは、三宅さんが30歳を前にして日本学術振興会奨励研究員に採用されたことから分かる。

その後、三宅さんの関心は徐々に戦後史に移っていくが、多くの共同研究や研究企画に参加する中で、日本現代史研究の中心的な人物となっていく。そして、研究者としての脂がのりきった時期に執筆したのが『レッド・ページとは何か』である。本書は日本のレッド・ページを扱った研究であるが、一国史的観点から書かれたものではない。本書の出だしはアメリカから始まる。アメリカのレッド・ページがいかに日本で行われるに至ったかを、まずはGHQの動きから探っていくのだが、太平洋を股にかけて議論を出発させていることから、「世界の中の日本」ということが十分に意識されている。しかも本書は、レッド・ページが日本でいかに不当に行われ、官庁や企業などがどのようにそれに引きずられたかを多くの統計資料を駆使して克明に描き出したものであり、内容は緻密である。本書が明らかにした点は多々あるが、労働組合もまたレッド・ページに与し、それには組合内の指導権争いが絡んでいたことを実証してみせたことは、まことに大きな成果であったということができよう。また、不当にページされた者のその後の人生までも追っており、日本敗戦直後の陰部の事実には執拗に迫っている。

三宅さんの世界史的視野に関わる研究には、他に韓国・朝鮮認識を扱ったものがある。「第三人」の言葉の由来や、韓国・朝鮮が高校教科書の中でどのように描かれてきたかを調査した研究などは、一国史を超えようとする試みである。三宅さんは教科書編纂にも尽力してきたが、高等学校用教科書『日本史A』（東京書籍）が外国人研究者に1ページにわたる文章の紙面を提供したことは画期的である。アメリカや韓国・インド・エジプト・ドイツなどの研究者が動員された。私も近くにいたせいで、在日朝鮮人の立場からの文章を寄稿させられた。これは高校日本史教科書としては、歴史上初めてのことであるが、三宅さんの提案に基づくものであり、人選も三宅さんがもっばら行ったようである。

三宅さんの歴史教育に対する関心は、2000年頃に「新しい歴史教科書をつくる会」による修正主義的な中学校歴史教科書が登場した際に遺憾なく発

揮された。当時三宅さんは各種の市民団体や教員組合などに招聘され講演活動を行っていたが、『世界の動きの中で読む日本の歴史教科書問題』はそうした活動が基礎となって執筆された著書である。当時は「つくる会」教科書への批判本が各種刊行されたが、三宅さんの著書の特徴は、やはり何よりも世界史的な視野から批判を行った点である。グローバリゼーションが拡大していく中で、世界的に右傾化が進行し、日本もまた例外ではないことが明らかにされている。当時は、新自由主義を随伴したグローバリゼーションにもなう格差社会の誕生が指摘され出した頃であるが、三宅さんはこのことをいち早く指摘した研究者の一人だったといえよう。そして、本書の中では注目すべき提言も行っている。すなわち、「現代における歴史は、グローバル、リージョナル、ナショナル、ローカルの四つの空間に即して、とらえていくことが求められている」というのだが、一国史的になりやすい日本史研究者がこうした発言をしたことに、私は強い敬意を抱いた。

三宅さんがこのような世界史的な視点をもつには、三宅さんなりの思索があったのは間違いないが、注目すべきは三宅さんは世界史的な研究交流によってもそうした視野を実地に培っていったということである。三宅さんはデリー大学やハイデルベルク大学の招聘客員教授を経験しただけでなく、コーネル大学でも在外研究を行っている。三宅さんの交友関係は世界的であり、私も何人かの海外研究者を紹介されたことがある。丸山真男の研究者として欧米で知られるハイデルベルグ大学のヴォルグガング・ザイフェルト教授とは三宅さんの介在もあって私も親しくなり、同大学を訪問する機会を得た。現代日本が世界からどのように認識されているかについて、三宅さんほどよく知る日本史研究者はいない。

大学行政の実績としては、千葉大学大学院人文社会科学研究所科長と千葉大学評議員を努めたことが特記される。同僚として断言できるが、三宅さんほど大学行政に通暁した人物は何人もいない。学科会議や教授会では、三宅さんの発言は的確なものであり、自ら献身的に仕事を引き受けるのを常としていた。学科や学部が大学内でどのように動けばいいか、あるいは千葉大学は今後どのようにあるべきかなどについて、多くの提言をしてきた。それゆえに、大学当局にも信頼が篤く、ここでは詳しくいえないが、重要な任を任さ

れて、渡米したこともある。

次に教育者としての三宅さんについていえば、三宅ゼミは学科の中で最も人数が多いゼミとして知られていたことを述べておきたい。やはりずいぶんとにぎやかなゼミのようで、噂をたまに聞くにつけ、学生たちは楽しげに授業の様子を語っていた。そのため、三宅ゼミには日本現代史だけでなく、日本近代史やアメリカ現代史、東南アジア現代史などの学生も多く参加していた。私が知るある女子学生は、高校時代に前述の『世界の動きの中で読む日本の歴史教科書問題』を読んで感銘を受けて千葉大学を受験したといっており、その人気ぶりがよくうかがえる。

以上、本人はほめすぎだというかもしれないが、嘘偽りはない。三宅さんは、いつも軽妙なユーモアと笑いを絶やすことがなかった。どんなに深刻な話をしている、三宅さんが登場すると、楽天的な気分させられるから不思議である。議論が袋小路に陥り、沈鬱な状況になっても、三宅さんはどこかに突破口を切り開いてくれた。とにかく頼れる存在であった。定年とはいえ、こうした人が千葉大学からいなくなるというのは、いかにも寂しい。今後は、三宅さんには「世界史の中の日本史」を三宅さんならではの切り口で語ってってもらいたい。世の中は変な方向に進んでいるが、三宅さんが語れば、どこかに出口が見えてくるように思われてならない。思う存分の新しい人生を踏み出されることを願ってやまない。

## 三宅明正先生 履歴書

生年月日 1953年3月30日生

### 学歴

- 1971年4月 東京教育大学文学部史学科入学
- 1975年3月 東京教育大学文学部史学科卒業
- 1975年4月 一橋大学大学院社会学研究科修士課程入学
- 1977年3月 一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了（社会学修士）
- 1977年4月 一橋大学大学院社会学研究科博士課程進学
- 1981年3月 一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位修得中途退学

### 職歴

- 1981年4月 日本学術振興会奨励研究員（1983. 3まで）
- 1983年5月 財団法人法政大学大原社会問題研究所員・研究員（1984. 9まで）
- 1984年10月 千葉大学助手（文学部、1987. 3まで）
- 1987年4月 千葉大学助教授（教養部、1994. 3まで、文学部、1994. 4～1998. 3まで）
- 1998年4月 千葉大学教授（文学部、2008. 3まで、2011. 4～2015. 3まで、大学院人文社会科学研究科、2008. 4～2011. 3まで、2015. 4～2017. 3まで、大学院人文科学研究院、2017. 4～現在に至る）
- 1995年4月 千葉大学大学院社会文化科学研究科（博士後期課程）授業担当（文部省の教員組織審査で㊦、なお同研究科は2006年4月以降大学院人文社会科学研究科に改組）
- 2007年4月 千葉大学大学院人文社会科学研究科長・千葉大学評議員（2009. 3まで）

### 併任教員歴

- 1997年9月 デリー大学（大学院、以下院と記載）招聘客員教授（1998. 3

まで)

2003年3月 コーネル大学ファカルティ・フェロー (2003.11まで、文部科学省長期在外研究員)

2009年9月 ハイデルベルク大学 (院) 招聘客員教授 (2009.12まで)

2012年12月 デリー大学 (院) 招聘客員教授 (2013.5まで)

### 非常勤講師歴

1981年10月 埼玉大学 (1982.3まで) / 1982年4月 中央大学 (1991.3まで、1993.4~1997.3まで、1998.4~2003.2まで、2004.4~2006.3まで) / 1984年4月 駒沢大学 (1985.3まで) / 1984年4月 東京大学 (1985.3まで) / 1984年4月 千葉大学 (1984.9まで) / 1988年4月 横浜国立大学 (1988.9まで、1994.10~1995.3まで、1997.4~1997.9まで、1998.4~2000.3まで) / 1989年4月 東京外国語大学 (1992.3まで) / 1991年4月 明治大学 (1992.3まで) / 1992年4月 日本女子大学 (1992.9まで) / 2001年10月 名古屋大学 (院) (2002.3まで) / 2014年4月 放送大学 (現在に至る) / 2014年4月 早稲田大学 (院) (2016.3まで)

### その他兼任職歴

1982年4月 アジア経済研究所受託国際連合大学研究プロジェクト「技術の移転・変容・開発—日本の経験」委員 ~1985年3月。

1985年4月 横浜市 横浜市史Ⅱ編集委員 ~2004年3月。

1987年4月 八王子市 八王子市議会史編集委員 ~1991年3月。

1990年4月 東京都中野区 男女参画推進会議委員 ~1992年3月。

1995年4月 総合研究開発機構 戦後経済政策資料研究会委員 ~1997年3月。

2002年4月 日韓文化交流基金 日韓文化フォーラム委員 ~2005年3月。

2002年4月 大学入試センター 教科科目委員会委員 ~2003年2月、2005年4月~2006年3月。

2007年12月 日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員 ~2009年12月。

2010年1月 日本学術振興会 最先端・次世代研究開発支援プログラム書

三宅明正先生を送る

面審査委員～2010年5月。

2011年6月 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館教員選考外部評価委員～2012年3月。

2012年4月 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館教員採用・昇任選考委員会委員～2012年9月。

2014年8月 日本学術振興会 特別研究員等審査会専門委員 ～2016年7月。

2014年8月 日本学術振興会 国際事業委員会書面審査員・書面評価員～2016年7月。

## 三宅明正先生 研究業績目録

### A 著書

#### I 単著書

- 1 『レッド・パーズとは何か』 大月書店、1994年9月。(総頁数294)
- 2 『世界の動きの中で読む日本の歴史教科書問題』 梨の木舎、2002年6月。  
(総頁数144)

#### II 共著書・共編著書

- 1 法政大学大原社会問題研究所編 『社会・労働運動大年表』 全4巻、労働旬報社、1986年10月～1987年1月、二村一夫ら11人での共編著。(総頁数1488)  
なお本書は、増補改訂の上で『新版社会・労働運動大年表』全2巻として、労働旬報社より1995年6月に別途出版された。(総頁数1691)
- 4 『九人の語る戦争と人間』 大月書店、1991年1月、若桑みどりとの共編著。(本人担当はPP. 3～32)
- 5 『日本全史』 講談社、1991年3月、濱田隆士ら8人での共編著。(本人担当はPP. 1084～1120)
- 6 『法廷に立つ歴史学』 大月書店、1993年5月、安在邦夫・加藤友康・安田浩との共編著。(本人担当はPP. 341～348)
- 7 『歴史と真実』 筑摩書房、1997年11月、中村政則ら10人の共著。(本人担当はPP. 27～48)
- 8 法政大学大原社会問題研究所編 『日本の労働組合100年』 旬報社、1999年12月、早川征一郎らとの共著。(本人担当はPP. 222～271)
- 9 『歴史の中の差別』 日本経済評論社、2001年6月、山田賢との共編著。(本人担当はPP. 1～35)
- 10 『展望日本歴史 第23巻 歴史の中の現在』 東京堂出版、2004年9月、高野和基との共編著。(本人担当はPP. 2～12、156～157、292～293)



### Ⅲ 自治体史（記述編。なお＊は編集委員を務めたもの）

- 1 『神奈川県史 通史編』第5巻、神奈川県、1982年3月（「社会運動の再生」「平和運動と基地反対闘争」「労働組合運動の展開」PP. 577～600、727～750、751～772を執筆）
- 2 『三鷹市議会史 記述編』三鷹市、1982年9月（「戦後の三鷹町議会」PP. 279～318を執筆）
- 3 ＊『横浜の歴史』横浜市、1989年4月、高村直助ら7人での共編著。（総頁数447）
- 4 ＊『八王子市議会史 記述編』第2巻、八王子市、1990年8月、中西又三・加藤幸雄との共著。（本人担当はPP. 5～234）
- 5 ＊『横浜市史Ⅱ』第1巻上、横浜市、1993年3月（「労働者状態と労働運動」PP. 1085～1130を執筆）
- 6 ＊『横浜市史Ⅱ』第1巻下、横浜市、1996年3月（「労働問題」PP. 1027～1108を執筆）
- 7 ＊『横浜市史Ⅱ』第2巻下、横浜市、2000年3月（「労働運動と労働者の状況」PP. 489～566を執筆）
- 8 ＊『横浜市史Ⅱ』第3巻下、横浜市、2003年7月（「労働問題・平和運動」PP. 477～563を執筆）

### Ⅳ 史資料集

#### ・単編書

- 1 『横浜市史Ⅱ 資料編5 戦時・戦後の労働と企業』横浜市、1995年3月。（総頁数694）
- 2 『経済安定本部 戦後経済政策資料』第38～39巻、労働編(1)(2)、日本経済評論社、1996年1月。（総頁数1629）

#### ・共編書

- 1 『福岡県史 近代史料編—東洋タイムス—』全4巻、福岡県、1984年3月～86年11月、田中直樹との共編著。（総頁数1018）
- 2 『資料日本占領2 労働改革と労働運動』大月書店、1992年4月、竹前栄治・遠藤公嗣との共編著。（総頁数642）

- 3 歴史学研究会編『日本史史料5 現代』岩波書店、1997年4月、小林英夫ら5人での共編著。(総頁数406)

## B 論文

- 1 「近代日本における鉄工組合の構成員」(『歴史学研究』第454号、1978年3月)(PP. 22~35、54)
- 2 「第一次大戦後の重工業大経営労働運動」(『日本史研究』第197号、1979年1月)(PP. 1~40)
- 3 「日露戦争前後の労働者運動」(『社会経済史学』第44巻第5号、1979年3月)(PP. 25~44)
- 4 「多面化する民主主義運動」(金原左門・竹前栄治編『昭和史』有斐閣、1982年7月、増補改訂版1989年10月)(PP. 307~340)
- 5 「昭和恐慌期の労資関係」(『日本史研究』第240号、1982年8月)(PP. 1~27)
- 6 「労資関係の変容」(飯田賢一編『技術の社会史』第4巻、有斐閣、1982年11月)(PP. 264~280)
- 7 「戦後労働運動の創始」(『神奈川県史各論編』第1巻、神奈川県、1983年3月)(PP. 787~815)
- 8 「第一次東芝争議」(『社会政策学会年報』第28集、御茶の水書房、1984年5月)(PP. 165~184)
- 9 「現代社会運動の諸局面」(歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史』第12巻、東京大学出版会、1985年10月、庄司俊作と共同執筆)(PP. 189~238)
- 10 「都市下層の女子労働」(中村政則編『技術革新と女子労働』国際連合大学、1985年12月)。(PP. 107~139)

なお本論文は2008年に以下の英文版が別途出版された。

“Female Workers of the Urban Lower Class.” in Nakamura, ed., *Technology Change and Female Labour in Japan*. United Nations University Press, 1994. (PP. 97~131)

- 11 「ファッショ化と民衆」(今井清一・藤原彰編『十五年戦争史』第1巻、

- 青木書店、1988年6月、平賀明彦と共同執筆）(PP. 211～246)
- 12 「二・一ストはなぜ強行されなかったか」(藤原彰ほか編『日本近代史の虚像と実像』第4巻、大月書店、1989年12月) (PP. 97～113)
  - 13 「『逆コース』と社会」(歴史学研究会編『日本同時代史』第2巻、青木書店、1990年9月) (PP. 191～222)
  - 14 「東芝争議(1945～46年)」(労働争議史研究会編『日本の労働争議(1945～80年)』東京大学出版会、1991年1月) (PP. 39～80)
  - 15 「戦後改革期の日本資本主義における労資関係」(『土地制度史学』第131号、1991年4月) (PP. 35～43)
  - 16 「日本社会におけるホワイトカラーの位置」(『社会政策学会年報』第39集、御茶の水書房、1995年6月) (PP. 3～18)
  - 17 「労働運動・市民運動」(『岩波講座日本通史』第20巻、現代1、岩波書店、1995年7月) (PP. 113～145)
  - 18 「戦後期日本の労働史研究」(『大原社会問題研究所雑誌』第510号、2001年5月) (PP. 17～30)
- なお本論文は、学術文献刊行会『日本史学年次別論文集』2001年版、近現代3(2004年3月) (PP. 647～654) に採録された。
- 19 「インフォーマル・グループ小史——横船「二八会」史料から」(『市史研究よこはま』第14号、2002年3月) (PP. 27～45)
  - 20 「本当に新しい歴史教科書とは何だろうか」(『歴史評論』第632号、2002年12月) (PP. 2～13)
  - 21 「高野実らのAFL宛書簡」(東京経済大学『現代法学』第8号、2005年1月) (PP. 99～113)
  - 22 「戦後改革と戦後市民社会」(歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座』第10巻、東京大学出版会、2005年7月) (PP. 99～126)
  - 23 「朝鮮戦争と日本の社会」(安田浩・趙景達編『戦争の時代と社会』青木書店、2005年9月) (PP. 300～313)
  - 24 「近現代の韓国・朝鮮はどう記されてきたか」(宮嶋博史・金容徳編『近代交流史と相互認識』Ⅲ、慶應義塾大学出版会、2006年7月) (PP. 321～357)

なお本論文は2008年に以下のハングル版がソウルで別途出版された。

미야케 아키마사 <근현대의 한국·조선은 어떻게 기술되었는가 : 일본의 “고교일본사” 전교과서의 사적 검토를 통해> (김용덕/미야지마 히로시 엮음 《근대교류사와 상호인3: 1945년 전후》 한일공동연구총서 18, 2008년)

- 25 「戦後危機と経済復興 2 生産管理と経営協議会」(石井寛治・原朗・武田晴人編『日本経済史』第4巻、東京大学出版会、2007年9月)(PP. 357~392)
- 26 「諸外国の日本同時代史研究」(『同時代史研究』第1号、2008年12月)(PP. 14~21)
- 27 「日本における『労働非商品の原則』の受容」(安孫子誠男・水島治郎編『持続可能な福祉社会へ 第3巻 労働』勁草書房、2010年5月)(PP. 171~187)
- 28 「『60年安保』と労働者の運動」(『歴史評論』第723号、2010年7月)(PP. 34~45)
- 29 「近代日本経済資料論 5 海外文書館資料」(石井寛治・原朗・武田晴人編『日本経済史』第6巻、東京大学出版会、2010年9月)(PP. 227~239)
- 30 “Rewriting history in a textbook in contemporary Japan.” in Gotelind Müller, ed., *Designing History in East Asian Textbooks*. Routledge, London, 2011. (PP. 163~180)

同書のペーパーバック版は2013年に出版された。

- 31 「日本の戦後改革」(和田春樹ほか編『岩波講座東アジア近現代通史』第7巻、岩波書店、2011年2月)(PP. 304~321)
- 32 「記録を創り、残すということ」(『歴史学研究』第884号、2011年10月)(PP. 54~58)

同論文は一部改訂の上、歴史学研究会編『震災・核災害の時代と歴史学』青木書店、2012年5月、に再録された。(PP. 209~220)

- 33 “Japanese Overseas Students in India in the 1950’s” 千葉大学『人文社会科学研究』第27号、2013年9月(PP. 1~7)
- 34 「戦後・現代・同時代—現在につながる時代をどのように呼ぶのか

(Nachkriegszeit, Gegenwart, Heute: Wiesoll man die zeit, diezur Gegenwart führt, nennen?)」 Wolfgang Seifert zu ehren, *Japan und das Problem der Moderne*. IUDICIUM, Munchen, 2015 (PP. 144~150))

- 35 “Social Transformation during the High-Growth Era in Postwar Japan” 三宅明正編『日本労働史の研究』千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第311集、2017年3月 (PP. 3~17)

### C 研究ノート・研究動向・講演・座談会

- 1 「昭和恐慌下労働争議の一特質」(『一橋論叢』第84巻第1号、1980年7月) (PP. 142~148)
- 2 「二・一ゼネストはなぜ中止されたか」(『歴史地理教育』第470号、1991年3月) (PP. 38~42)  
本稿は、歴史教育者協議会編『日本の歴史 現代』(河出書房新社、1995年7月)に再録された。
- 3 「労働改革」(袖井林二郎・竹前栄治編『戦後日本の原点』下巻、悠思社、1992年7月、竹前栄治との対談) (PP. 1~59)
- 4 「占領下労働運動をどう見るか」(『世界』第665号、1999年9月、遠藤公嗣・岡部史信・佐藤一・竹前栄治・三宅明正の座談会) (PP. 260~272)
- 5 「外国人による日本近現代史研究」(『別冊歴史読本』第46号〈日本史研究最前線〉、2000年6月) (PP. 166~167)
- 6 「『第三国人』ということば」(『評論』第125号、2001年6月) (PP. 1~3)
- 7 「粗製濫造—誤りに満ちた記述」(『別冊歴史読本』第87号〈歴史教科書大論争〉、2001年10月) (PP. 105~109)
- 8 「若い人びとの労働環境とナショナリズムの行方」(『歴史地理教育』第634号、2002年1月) (PP. 58~64)
- 9 「グローバル化と歴史の理解」(『ニューサポート』2002年5月) (PP. 7~9)
- 10 「世界の動きと歴史の理解」(『東京の歴史教育』2003年7月号) (PP. 3~17)
- 11 「高度経済成長の光と影」(ひらかれた歴史教育の会編『新しい歴史教

- 科書』の〈正しい〉読み方』青木書店、2007年3月、PP. 317～319)
- 12 『『通史』への疑問』(『千葉史学』第63号、2013年11月)(PP. 1～6)
  - 13 『座談会 世界史の中の安倍政権』(南塚信吾・小谷汪之・木畑洋一・伊集院立・下村由一・藤田進・三宅明正・百瀬宏、計8人での座談会) 2015年12月、日本経済評論社。(総頁数222)

## D 史資料解題ほか

### I 史資料解題・紹介

- 1 「旧『東芝堀川町従業員組合』史料について」(『神奈川県史研究』第48号、1982年7月)
- 2 「合理化反対闘争」「合理化と労働組合」(法政大学大原社会問題研究所編『日本労働年鑑』第54集～第57集、労働旬報社、1983年11月～1986年6月)
- 3 「三菱重工横浜製作所(旧横浜造船所)労働組合史料について」(『市史研究よこはま』第1号、1987年3月)
- 4 「1949年国鉄人民電車事件に関する新史料」(『市史研究よこはま』第2号、1988年3月)
- 5 「アメリカにおける日本労働史の新資料」(『大原社会問題研究所雑誌』第409号、1992年12月、遠藤公嗣と共同執筆)
- 6 「アメリカにおける五つの機関の史料調査報告」(『市史研究よこはま』第6号、1992年12月)
- 7 「戦後改革期の労働政策と経済安定本部」(『NIRA政策研究』第8巻第7号、1995年7月)
- 8 「インド国立公文書館探訪」(『占領史研究通信』第18号、1999年3月)
- 9 「労働形態の変容」(歴史学研究会編『世界史史料』第12巻、岩波書店、2013年4月)

### II 科学研究費成果報告書ほか

- 1 「明治・大正期における地方政治の実証的研究—千葉県下を主要事例として—」(『平成2年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告

- 書』 課題番号63450046、1992年3月、宇野俊一・三浦茂一と共同執筆)
- 2 三宅明正『戦時・戦後の労働者組織に関する実証的研究』平成6年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書、課題番号05801043、1995年3月
  - 3 「日本の労働者が集まった『場』の史的検討」(『社会的結合についてのアジア比較史的研究：2004-2006年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書』課題番号16320079、2007年3月)
  - 4 三宅明正編『北東アジアにおける「記憶」と歴史認識に関する総合的研究』平成18-21年度科学研究費基盤研究(A)：研究成果報告書、課題番号18202014、2010年3月
  - 5 三宅明正編『日本の社会・労働運動の史的研究』千葉大学大学院人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書第166集、2011年3月
  - 6 三宅明正編『日本における「標準化」の史的考察』千葉大学大学院人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書第217集、2012年3月
  - 7 三宅明正編『近代日本における個人史研究の射程』千葉大学大学院人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書第296集、2016年3月
  - 8 三宅明正編『海外における日本近現代史像の変容』平成23-26年度科学研究費補助金基盤研究(B)：研究成果報告書、課題番号24320122、2016年3月
  - 9 三宅明正編『日本労働史の研究』千葉大学人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書第311集、2017年3月、なお所収の三宅論文は上記B-35。

### Ⅲ 概説

- 1 「デモクラシーと大正文化」(貫達人監修『神奈川県の歴史』下巻、有隣堂、1986年6月) PP. 131~152
- 2 「大正デモクラシーの時代」(佐原真ほか編『日本歴史館』小学館、1993年12月)
- 3 『千葉大学50年史』千葉大学、1999年11月、共編著。(本人担当はPP. 109~128、PP. 140~164)

- 4 「第11章核の時代の始まり 序論」「第12章スプートニクの飛翔と安保序論」(南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵編『新しく学ぶ西洋の歴史』ミネルヴァ書房、2016年2月)

#### IV 教科書

- 1 高等学校用教科書『日本史A』東京書籍、1997年3月文部省検定済、田中彰らとの共著。
- 2 高等学校用教科書『日本史A—現代からの歴史』東京書籍、2002年4月文部科学省検定済、田中彰らとの共著。
- 3 高等学校用教科書『日本史A—現代からの歴史』東京書籍、2007年3月文部科学省検定済、田中彰らとの共著。
- 4 高等学校用教科書『日本史A—現代からの歴史』東京書籍、2012年3月文部科学省検定済、大門正克らとの共著(執筆代表者)。
- 5 高等学校用教科書『日本史A—現代からの歴史』東京書籍、2016年3月文部科学省検定済、共著(執筆代表者)

#### V その他

- 1 「ホワイトカラーの雇用管理の生成史——座長報告」(『社会政策学会誌』第7号、2002年3月)(PP.180~182)
- 2 「どういう教科書を作り、何を目ざそうとしたのか」(『ニューサポート』2012年4月)(PP.5)
- 3 「『誇りうる歴史』とは何だろうか」(『東書eネット』2013年3月)(PP.1~2)

#### E 書評

- 1 「隅谷三喜男編著『日本労使関係史論』」(『歴史学研究』第473号、1979年10月、西成田豊と共同執筆)
- 2 「家永三郎教授東京教育大学退官記念論集刊行委員会編『日本国憲法と戦後教育』」(『歴史学研究』第475号、1979年12月)
- 3 「労働運動史研究会編『黎明期日本労働運動の再検討』」(『労働運動史研



- 究』第63号、1980年10月)
- 4 「大庭伸介著『浜松・日本楽器争議の研究』」(『労働問題研究』第3号、五月社、1981年11月)
  - 5 「成田龍一編『加藤時次郎選集』」(『歴史評論』第388号、1982年8月)
  - 6 「竹前栄治著『戦後労働改革』」(『歴史学研究』第521号、1983年10月)
  - 7 「山本潔著『東芝争議(1949年)』」(東京大学『社会科学研究』第35巻第4号、1983年12月)
  - 8 「二村一夫著『足尾暴動の史的分析』」(『史学雑誌』第98編第12号、1989年12月)
  - 9 「上野千鶴子著『家長長制と資本制』」(『大原社会問題研究所雑誌』第399号、1992年2月)
  - 10 「法政大学大原社会問題研究所編『証言 産別会議の誕生』」(『季刊労働法』第179号、1996年8月)
  - 11 「山之内靖ほか編『総力戦と現代化』」(『土地制度史学』第161号、1998年10月)
  - 12 「上田修著『経営合理化と労使関係』」(『日本労働研究雑誌』第479号、2000年6月)
  - 13 「アンドルー・ゴードン著／二村一夫訳『日本労使関係史』」(『歴史評論』第776号、2014年12月)
  - 14 Shirizu sengo Nihon shakai no rekishi, 1. Kawaru shakai, kawaru hitobito: 20-seiki no naka no sengo Nihon (The Social History of Postwar Japan, Vol. 1. Changing Society, Changing Individuals: Japan's Postwar 20th Century), *Social Science Japan Journal* Volume 18, Number 1, Oxford University Press, Winter 2015,

## F 事典類

『大百科辞典』平凡社、『日本大百科全書』小学館、『国史大辞典』吉川弘文館、『戦後史大事典』三省堂、『朝日人物辞典』朝日新聞社、『日本史大事典』平凡社、『歴史学事典』弘文堂、『日本歴史大事典』小学館、『岩波日本史辞典』岩波書店、『アジア太平洋戦争史辞典』吉川弘文館に、日本近代・現代

史関係ないしは労働問題関連の項目を執筆。

### G 海外招待講演（直近10年内のもの）

- 1 MIYAKE, Akimasa. Rewriting history in a textbook in contemporary Japan.  
2009年3月17日 ハイデルベルク大学国際科学フォーラム主催の国際シンポジウム Shifting Re-creations of European and Asian 'Others' in East Asian Schoolbooks. における報告。ハイデルベルクで開催。業績B-30の元になったもの。
- 2 MIYAKE, Akimasa. East Asian History: Korean High School New Curriculum.  
2012年6月1日 韓国学術諸団体共催のJeju Forum 2012における報告。韓国 済州島で開催。
- 3 MIYAKE, Akimasa. Social Transformation during the High-Growth Era in Postwar Japan.  
2015年10月3日 ニューデリーに本拠を置くNGO Development Alternative主催の国際シンポジウム Inequality of Developing Asia. における報告。ニューデリーのIndia International Centerで開催。

### H 外部資金の取得状況（代表者としてのもののみ記載）

- 1 1986年4月から1987年3月 科学研究費補助金奨励研究(A) 戦後初期における労働運動の実証的研究
- 2 1988年4月から1989年3月 奨科学研究費補助金奨励研究(A) 占領期日本労資関係の史的研究
- 3 1993年4月から1995年3月 奨科学研究費補助金一般研究(C) 戦時・戦後の労働者組織に関する実証的研究 業績D-II-2
- 4 2006年4月から2010年3月 科学研究費補助金基盤研究(A) 北東アジアにおける「記憶」と歴史認識に関する総合的研究 業績D-II-4
- 5 2007年9月から2010年3月 文部科学省の大学院教育改革支援プログラム（大学院GP） 実践的公共学実質化のための教育プログラム（三宅

三宅明正先生を送る

は千葉大学大学院人文社会科学研究所長として申請)

- 6 2012年4月—16年3月 科学研究費補助金基盤研究(B) 海外における  
日本近現代史像の変容 業績D-II-8